

盲僧の読誦經典の源流

— 江田文庫本『仏説地心陀羅尼經』訳注 — (上)

石井 公成

はじめに

『平家物語』を語る琵琶法師や、琵琶を弾きつつ『地神經』を読誦する盲僧の起源については、諸説あるが、琵琶を弾じつつ仏教經典を読誦する例は、唐の道宣が著した『続高僧伝』巻二十・釈解脱伝の末尾に見えている。^①

永徽中有人無目、不知何來。彈琵琶誦法華一部。向望人山、手彈口誦、以娛此山。亦不測其然。(大正五〇・六〇三下)

すなわち、永徽年間(六五〇～六五五)に、どこからともなく現れた盲人が、靈迹で有名であった望人山に向かつて琵琶を弾きながら『法華經』を誦し、この山を樂しませており、なぜそうするのかは不明だったという。「有人無目(人の目無き有り)」とあるため、僧侶ではなかったらしいことが分かる。これは、日本で言えば、盲目の芸人が神仏の前でおこなう法樂に当たるものと見ることできよう。

盲人が琵琶を弾じて職業とすることは、中国では六朝半ばには既に見えている。南齊期（四七九—五〇二）に活躍した釈真玉について、『統高僧伝』巻六の伝では、次のように記している。

釈真玉、姓董氏、青州益都人。生而無目。其母哀其、及年至七歲、教彈琵琶、以為窮乏之計。而天情俊悟、聆察若絳、不盈旬日、便洞音曲。後鄉邑大集、盛興齋講。母携玉赴會。一聞欣領曰、若恒預聽、終作法師、不憂匱餒矣。（大正五〇・四七五中）

これによれば、真玉は生まれつき目が見えなかったため、母がこれを哀れみ、七歳になったところで生活方法として琵琶を教えたところ、たちまち音曲を身につけたものの、後に盛大な齋会で經典の講義を聞いて大いに喜び、いつも聴くことができれば講釈を体得して説法師とすることができ、飢える心配はなくなるだろうと母に告げた。そこで、以後、母は風雨をもとませず、毎日連れて講釈を聞かせに行つたため、真玉は後に有名な講釈僧となつたという。このことから、齋会における一般信者向けの説法は、琵琶芸人が「自分も少し練習すればやれる」と思ふような性格のものもあつたことが知られる。つまり、真玉が聞いた説法には、美声で經典に節をつけて詠じる部分を重視した芸能色の強いものだつたのだろう。こうした説法は、当時の芸能から影響を受けていたであろうし、また逆に門付けして歩く盲人芸能者などにも影響を与えたものと思われる。

朝鮮では、高麗の一然が編集した『三國遺事』巻第一「文虎王法敏」条に、新羅時代の琵琶居士の話が見える。

公曰。陛下若以小臣為宰、則臣願潛行国内、示民間徭役之勞逸、祖賦之輕重、官吏之清濁、然後就職。王聽之。公著緇衣、把琵琶為居士形、出京師……巡行里閭。（大正四九・九七二下）

すなわち、文虎王の代（六六一—六八二）に、宰相となるよう請われた庶弟の車得公は、その前に国内を微行して巡り、労役の多少、租税の輕重、官吏の清濁などの民情を知りたいと申し出、黒い衣を着て琵琶を持ち、居士の形となつ

て都を出、各地を探ったという。むろん、琵琶を弾じつつ経典を誦したり仏教系の芸能をしたりしながら旅したのだろう。増尾伸一郎は、『三国遺事』では他にも「念仏僧」「門僧」「歌舞僧」などと呼ばれる僧侶たちが、寺院から出て各地で芸能をともなった仏事や修行を行っていたこと、また後代には読経を中心として祈禱をおこなった盲僧たちは読経師・経巫・経匠・盲覲などと呼ばれたことを指摘し、その歴史について概説している。⁽²⁾

日本では、岩橋小弥太によって早くに指摘されているように、盲人が琵琶を弾じつつ『地心経』を誦すること、清水寺別当の定深が十二世紀初めに著した『東山往来』に見えている。それによれば、祟りが多かったため、「占人」が『地心経』を誦すべきだと告げてきたがどうすべきかという問いに対し、答者は、この経は間違いだらけで他の経典と矛盾する記述が多く、文章も和臭が見えるため、仏法を愚弄し、利益をむさぼろうとする「日域の凶人」の偽作だとする非難がなされている。すなわち、『東山往来』当時は、様々な災難が頻発しており、地神を祀ることによってそれらを鎮めると称するこの経典を誦することが流行していたのだろう。

また、『看聞御記』の応永三十年（四二一八）八月五日条でも、琵琶法師を招いて『地心経』を読むのを聞いたとある。以後になると『地神経』という呼び方が多くなるが、本経は以後様々な文献に登場しており、九州では近年まで琵琶盲僧によって用いられていた。⁽³⁾

韓国では、本経は「読経（トッキョン）」などと称される盲目や暗眼の民間宗教者に伝承されてきた。⁽⁴⁾ 全羅南道の珍島において人類学的調査を行っていた伊藤亜人がその一例を発見しており、荒木博之がそのうちの『地心経』部分を紹介して解説し、翻刻を掲載している。荒木は、経が説かれた因縁は日本伝来本の方が合理的で詳しく、真言部分には韓国伝来本の方が詳しいものの、韓国本は薩摩の常楽院本に近いことなどから見て、『地心経』は韓国から日本に伝わったものと推定している。⁽⁵⁾

さらに、琵琶居士など古代韓国の宗教的芸能者や、道教的な宗教儀礼を継承した李朝以来の民間の盲覲（パンス）の伝統に注目した増尾伸一郎は、『地心経』を含む祈禱用の疑偽経典集である『仏説広本大歳経』について紹介し、崇禎八年（一六三五年）の年季を有する韓国国立中央博物館所蔵本（登録番号：古一七四九一三）の影印を論文末尾に付した。増尾も、韓国で流布していた経が日本に伝わったものと見ている。⁷⁾

日本では、琵琶を弾ずる僧形の盲人芸能者に関する論文は多く、彼らが読誦していた『地心経』ないし『地神經』もしばしば言及されてきた。近年では、星野和幸が曖昧な点の多い盲僧の定義そのものを再検討すると同時に、『地神經』のテキストの系統や演奏形態などについて精力的に研究を進めているため、本稿では、盲僧の定義や日本における『地神經』の様々な系統については、本号に掲載される星野論文⁸⁾に任せ、ここでは韓国に伝えられてきた漢文の『地心経』の訳注を試みたい。韓国本は古い形態を保っている部分があるためであり、また、これまで本経をとりあげたのは、民族学者や音楽・芸能関係の研究者が多いこともあつてか、報告されているテキストは句読の誤りや誤字などをそのままにしているほか、具体的な内容に関しては正確に理解されていないと思われるためである。

一 江田文庫本『仏説地心陀羅尼経』の概説

本稿では、「順治十四年（一六五七）冬丁酉四月日長興地天冠山開板」とする刊記を有する駒澤大学図書館所蔵の江田文庫、すなわち、朝鮮仏教研究者であつた江田俊雄の旧蔵中の版本『仏説広本大歳経』⁹⁾（江田文庫一）に収録されているものを底本として、句読と訳注を付す。

江田文庫本は、縦が三十四、六センチ、横が二十三、五センチ。『仏説広本大歳経』『仏説広本地心経』『天地八

佛說地心陀羅尼經序尾

불설다심다라니경서

夫法身無相相而等虛空至道絕言

부법신무상상이동허공지도결언

言而振法界相而等虛空故見相則

언이진법계상이동허공고견상즉

無不種善言而振法界故聽音則莫

무불종선언이진법계고청음즉막

非獲福今此經者滅三毒之猛火斷

비획복금태경자멸삼독지망화단

八難之利刃其為旨也十二月將即

『陽神呪經』が収録されている。中央博物館本と同様、冒頭の『仏説広本大歳經』に続いて、「仏説地心經陀羅尼經序」と「仏説地心陀羅尼稽請」と称される文章が来ており、中心となる『仏説地神陀羅尼經』と本經の回向偈が続き、その後、『天地八陽神呪經』が来ている。罫が入っており、一丁に六行十四字、総計八十丁。漢字の左側にはハングルで漢字音が示されている。この版本は実際に用いられていたようであり、『天地八陽神呪經』ではハングル部分に朱で句点が入れている。末尾には「仏説天地八陽經終」とあつて、続く行に「主上三殿下寿万歳」と記される。

「仏説地心經陀羅尼經序」「仏説地心陀羅尼稽請」「仏説広本地心經」そして回向偈の部分のテキストは、増尾が紹介した一六三五年の刊記を有する版本を筆写した韓国中央博物館所蔵の写本とほとんど同じだが、中央博物館蔵の写本、および荒木博之が翻刻した李準容氏所持本と違い、版本だけあつて誤字が無く、これによつて中央博物館本の誤りや読み取りにくい箇所を訂正することができる。現時点における最良のテキストだ。ただ、江田文庫本は、摺りが悪い部分に補筆した部分もあるため、実際の板行年代は刊記の時期より下るものと推測される。

「經序」の冒頭は、大乘經典に対して東アジアで付される一般的な美辭麗句が述べられており、以下、「十二月將」のように中国の陰陽家が尊ぶ神、「十二天將」のように『陀羅尼集經』などに見えるインド由来で仏教に取り込まれた神、「十二地神」のように朝鮮のものと思われる神が言及され、この經典を誦する功德が説かれる。

これに続く「仏説地心陀羅尼稽請」は、經典誦請に当たつて仏菩薩や神々の來臨と加護を願うもの。「稽請」は、お願いするの意であつて、『涅槃經』などにも見えている。仏菩薩や十二月將、五帝龍王、土公・土王などに帰依し、この經典を誦する功德を諸天や五帝龍王や土公土王などに回向することにより、亡くなった父母などの追善や現世安樂、様々な願いの成就などが実現するよう願う文章だ。

本体に当たる『仏説地心陀羅尼經』では、仏が涅槃に入る際、五方龍王や眷属が地中に葬ることを承知しなかつ

たため、仏が生滅の法を説法したものの、龍王たちはそれでも信伏しなかった。そこで、仏は棺から立ち上がった。五龍王のために五色の幣帛を捧げ、地神たちの名を呼び立て、この『地心経』を演説してから涅槃に入ったとする。そこでようやく香木の薪に火をつけることができ、五龍王やその眷属も仏を礼拝したが、仏は彼らのために「神呪陀羅尼」を説いたとして、龍王や地神や日本で言えば陰陽道風な神たちの名を列挙した長大な陀羅尼が示される。仏はその後で、阿難に向かつて、父母などが亡くなって墓に安置しようとする際や、土地に新たに家を建てようとする時などは、この経を読誦すべきことを説き、その功德を強調する。ついで仏は、様々な利益を求める者たちのために、短い呪を説き、さらに短い「地心陀羅尼」を説く。これに続けて、流通分が説かれて経が終わり、その後に向偈が付されている。

『東山往來』が指摘しているように、荒唐無稽な内容であつて初歩的な間違いが多く、冒頭の「菩提双樹の下に在りて般涅槃に入る」という部分からおかしい。伝統仏教の『涅槃経』でも大乘の『涅槃経』でも、釈尊はクシナガラに至つて娑羅双樹のもとで亡くなつたとしているのに対し、本経では菩提樹下での成道の場面と間違えて「菩提双樹」と記し、「須弥の北面」に埋葬しようとしたなど、でたらめな記述が続いている。しかも、舍利弗は釈尊の涅槃の前に亡くなつてしまつたにもかかわらず、仏は入涅槃時に「阿難・舍利弗」のために説法するのだ。日本伝来本では、こうした部分が多少改められているのは、非難を受け、受持していた者たちが訂正したのだろう。

ただ、火葬に際して火がつかかなかつたとする伝承は法顯訳『大般涅槃経』にも見えている。摩訶迦葉尊者が他国におり、世尊が涅槃に入ったと聞いて慌てて多くの修行者たちと駆けつける途中であるため、如来が神通力で火がつかないようにしたとするのだ（大正一・二〇六下）。また、同経には、釈尊の涅槃時に天龍八部たちが喜ばなかつたとする記述も見える。僧侶たちが涅槃に入ろうとする世尊を取り巻いて立つてしまつたため、天龍八部たちは仏

に近づいて法を聞くことができず、不満に思ったと記されている(同、一九九中)。また、地神を信仰すれば様々な財宝などが手に入るとは、『金光明経』の堅牢地神品などが強調するところだ。『地心経』の作者はそうした仏教の伝統を踏まえつつ、中国や韓国の地鎮の習俗を取り入れて『地心経』を制作したのだろう。

経中で最も重視されている五方龍王は、梁代の『慈悲道場懺法』に見えるほか、インドの呪術的要素が強い六世紀頃成立の偽経、『灌頂経』に見えている。陰陽五行思想に基づく六朝期の民間信仰と仏教の関係は、今後研究を進めていく必要がある。

なお、地鎮に関する経典であるため、経題については「地心」でなく、日本の現存本のように「地神」とある方が分かりやすい。ただ、江田文庫本に付されているハンゲルが示すように、韓国語では「心」は *sin*、「神」は *sin* であって、発音が異なるため、韓国での混同は考えにくい。おそらくは、玄奘訳『諸仏心陀羅尼経』や不空訳『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』(大悲心陀羅尼経)を初めとする「心陀羅尼」や「心陀羅尼経」の類に習い、地鎮に関する陀羅尼経典ということで、「地心陀羅尼経」と称したのだろう。

翻刻にあたっては、異体字は通行のものに改めた。神々の名を連ねた陀羅尼部分は長大であるうえ、内容も不明な部分が多いため、この部分については、今回は原文を掲載するにとどめ、訳は本文のみとして、文脈が理解できるように意味を補った形とする。

本経は仏教の常識から外れた内容が多いため、学僧ではなく、経典やその注釈を聞きかじった程度の人が書いたことが知られる。また、「捧五色幣帛」と書くべきところを、韓国語の語法のまま「五色幣帛捧」と書くなど、破格の語法が目立つが、それらについては別稿で論ずることとし、一々注記しなかった。ただ、「焼奉(焼き奉る)」といった和風な敬語表現も見えているため、江田文庫本については、韓国での偽経を受けて日本で増補されたテキスト

トが韓国に逆輸入された可能性も考慮して調査を進めるべきだろう。韓国にこうした表現が早くからあったのであれば、その場合は、本経は韓国語語法史上の貴重な資料となる。

二 「仏説地、心陀羅尼經序」 訳注

仏説地、心陀羅尼經序

夫法身無相、相而等虚空、至道絶言、言而振法界。相而等虚空、故見相則無不種善。言而振法界、故聴音則莫非獲福。

【訓】 仏説地、心陀羅尼經序

夫れ法身は相無く、相あれば虚空に等し。至道は言を絶し、言えば法界に振るふ。故に相を見れば、則ち善を種ゑざる無し。言えば法界に振るふ、故に音を聴けば、則ち福を獲ざる莫し。

【訳】 仏説地、心陀羅尼經序

そもそも、真理としての仏の体には姿が無いにもかかわらず、姿を示せば多様であつて虚空にも等しい。究極の悟りは言葉から離れているものの、語れば全世界に行き渡る。このため、姿を見れば来世の因として善行に努めない者は無く、教えを聴けば功德を得ない者は無い。

【注】 法身無相〓大乘經典や中国仏教文献の常套表現。

莫非獲福〓「非」は「不」の誤り。この種の誤りが多いが、以下注記しない。

今此經者、滅三毒之猛火、断八難之利刀。其為旨也、十二月將即十二天將、十二地神即百億釈尊。我牟尼大覺者、

真体以万化、広度六趣四生、声教以二音永散千障万害。

【訓】今、此の経は、三毒を滅する猛火にして、八難を絶つ利刀なり。其の旨たるや、十二月将は即ち十二大将にして、十二地神は即ち百億积尊なり。我が牟尼大覚は、真体は万化を以て、広く六趣四生を度す。声教は一音を以て、永く千障万害を散す。

【訳】今、此の経は、(貪瞋痴の)三毒を焼き尽くす猛火であつて、(地獄・餓鬼など)八種の困難な状況を断ち切る鋭利な刀である。その趣旨はと言えば、(地神である)十二月将は『薬師経』などが説く護法神である)十二大将に他ならず、十二地神はまさに(本体からの化身として現れた)百億の积尊に他ならない。偉大な覚者である我が积迦牟尼は、真体は無数の化身によつて六道の様々な生き物たちを救う。その説かれた教は、たった二つの言葉でもつて、永遠に無数の障害を散らしてしまふ。

【注】百億积尊は代表的な菩薩戒經典である『梵網経』が、积迦が千の化身の积迦を現し、それぞれの积迦がさらに多数の积迦を化身として現じると説いていることによる(大正二四・九九七下)。

然則喜天龍之妙術、安土地之嚴威。由是犯大歳將軍之方、不能侵逼動。龍虎騰虵之所未便害損。門丞戸尉執神劔而護室、家王父母轉仙車而進門。土公地媪抱德趨修福之縁、魑魅魍魎奉香獻読経之所。

【訓】然れば則ち天龍を喜ばす妙術にして、土地を安んずるの嚴威なり。是に由りて、大歳將軍の方を犯すも、侵し逼り動ずる能はず。龍虎騰虵の未だ便ち害損せざる所なり。門丞・戸尉、神劔を執りて室を護り、家王父母、仙車を転じて門に進む。土公・地媪、徳を抱きて修福の縁に趨き、魑魅魍魎、香を奉じて読経の所に献す。

【訳】 すぐである以上、この経典は神や龍などを喜ばせる巧みな手段であり、土地を安らかにさせる威力なのだ。この経典によつて、(墓や建物を建てる際に) 太歳將軍がいる方角を犯しても、人を侵し迫り動かすことがない。龍や虎や騰蛇などによつて損なわれることがない。門を守る神々は、神劍を持つて家を護り、男女の土地の神は、仙人の車に乗つて門までやつて来る。男女の土地神が、功德をかかえて善行実践の場によつて来るうえ、魑魅魍魎たちも、香を奉じて読経している場所に献ずる。

【注】 騰蛇 龍の一種。

門丞戸尉 土地を守る神々。志盤 『法界聖凡水陸勝會修齋儀軌』などに土地神に並んで見える。

家王父母 家を守る男女の神か。不明。仙車に乗る点では、西王母など道教系の神とその夫を思わせるが、西王母の夫は知られていない。

其然 暫読此経、何有妨害。况又一念信敬者、皆消万劫之罪、刹那披読者、肆興千年之福。故曰地心陀羅尼経也。

【訓】 其れ然れば、暫くも此の経を読めば、何ぞ妨害有らんや。況んや又た一念も信敬する者は、皆な万劫の罪を消し、刹那も披読する者は、肆に千年の福を起す。故に地心陀羅尼経と曰ふなり。

【訳】 そういうわけなので、ちよつとの間でもこの経を読めば、どうして鬼神の妨げがあるうか。まして、一瞬でもこの経を信じ敬うならば、誰もが(輪廻の) 無限の期間の間に犯した罪を消すのであつて、一瞬でも開き読んだ者は、千年にもわたる幸いをほしいままでに興すことになる。だから、『地心陀羅尼経』と言つのだ。

三 「仏説地心陀羅尼稽請」 訳注

仏説地心陀羅尼稽請

歸命頂礼三世仏 大乘教主釈迦尊 地前地上諸菩薩 十二月將化菩薩 五帝龍王諸眷屬 土公土王子孫等

【訓】 仏説陀羅尼經稽請

三世の仏、大乘教主釈迦、地前と地上の諸菩薩、十二月將と化菩薩、五帝龍王と諸眷屬、土公・土王と子孫等に、歸命頂礼す。

【訳】 仏説陀羅尼經稽請

三世の仏、大乘の教主である釈迦、十地以前と初地から十地までの諸菩薩、十二月將と化菩薩、五帝龍王と諸眷屬、土公・土王と子孫等に、歸命頂礼いたします。

今日奉誦地心經 因我所修一念善 我等施主子孫等 除災与樂成所願 証知加護滿所願 至心懺悔無量罪

【訓】 今日、地心經を奉誦す。我が修する所の一念の善に因り、我等施主と子孫等、災を除き樂を与え、願う所を成ぜん。証知し加護して所願を満たせ。至心に無量の罪を懺悔す。

【訳】 本日、私は『地心經』を奉読いたします。私が修する一瞬の善によつて、我ども施主と子孫等が、災害を免れて快樂を被り、願う所が成就しますように。この真心を証知して、我々を神秘的な力で護り、願偉をかなえてください。無量の罪を、心から懺悔いたします。

我等施主諸伴類 無明顛倒所迷惑 造作四重五逆罪 不信因果闡提罪 今对三宝尽懺悔 自歸依仏受五戒
自歸依法持八戒 自歸依僧持十善

【訓】我等施主と諸伴類、無明顛倒に迷惑せられ、四重・五逆の罪を造作す。因果を信ぜざる闡提の罪、今、三宝に対して悉く懺悔す。自ら仏に歸依して五戒を受け、自ら法に歸依して八戒を持し、自ら僧に歸依して十善を持す。

【訳】我々施主とその二門の者たちは、無明・顛倒によって迷わされ、四重禁戒や五逆罪などを犯し、因果を信じてない一闡提となる罪を犯していますが、今、三宝に対してこれらをすべて懺悔いたします。自ら仏に歸依して五戒を受け、自ら法に歸依して八斎戒を保ち、自ら僧に歸依して十善を保ちます。

【注】四重五逆罪…闡提罪Ⅱ教団追放になる淫・盜・殺・大妄語などの四重禁戒。父母・阿羅漢の殺害、出仏身血、僧伽分裂の五逆罪。仏教を信じずに譏り成仏できない一闡提 (icchantika) の罪。『涅槃経』に「若善果報不可尽者、謗方等経、犯五逆罪、毀四重禁、一闡提罪云何可俛」(大正十二・五四九下) に基づく表現。

戒香薫馥五分身 法界衆生同一体 共証妙果速成仏 三有無辺我必濟 五濁無辺我必斷 願行無量我必修
仏果無尽我必証

【訓】戒香薫馥たり、五分の身。法界衆生、同一体。共に妙果を証し、速かに成仏せん。三有無辺なるも、我必ず濟はん。五濁無辺なるも、我必ず斷ぜん。願行無量なるも、我必ず修せん。仏果無尽なるも、我必ず証せん。

【訳】五分法身には戒香が芳しい。全現象界の衆生は、本来同一の真理を本体としている。その衆生たちと共に玄

妙な仏果を悟り、速やかに成仏しよう。三有の世界は無限だが、私はその住人たちを必ず済おう。五濁の世界は無限だが、私は必ず断じよう。菩薩の願行は無限だが、私は必ず実践しよう。仏果の功德は無限だが、私は必ず証得しよう。

【注】五分身 戒身・定身・慧身・解脱身・解脱知見身の五分法身。

以此誦經生功德 資三界五類諸天 五帝龍王諸眷屬 土公土王子孫等 家内八方諸奉神 三十六因眷屬衆
先亡父母尊靈等 永離業道速成仏 現前尊者得安穩 無諸災難得所求 一切大願必円満

【訓】此の誦經より生じる功德を以て、三界五類の諸天、五帝龍王と諸の眷屬、土公土王子孫等、家内八方諸奉神、三十六因眷屬衆、先亡父母尊靈等に資す。永く業道を離れ、速やかに成仏せんことを。現前の尊者は安穩を得、諸の災難無く、求むる所を得て、一切の大願、必ず円満せん。

【訳】この経を読誦することによつて生まれる功德を、三界五類の諸天、五帝龍王と諸の眷屬、土公・土王と子孫等、家内八方に奉じている神々、三十六龍と眷屬衆、亡くなった父母の靈等に回向する。これによつて、永く地獄や餓鬼などの悪趣から離れて、速やかに成仏しますように。また現存の方々については、安穩となつて、諸の災難が無く、ほしいものが手に入り、一切の大願が必ず成就しますように。

【注】三十六因 未詳。回向偈には、「三十六龍」とある。

家内八方諸奉神 密教經典には、インド由来の八方神への供養が説かれるが、「家内」とあるため、ここでは、中国の民間信仰から入った神々か。

四 『仏説地心陀羅尼經』(一) : 本文前半の訳注

仏説地心陀羅尼經

如是我聞、一時仏在菩提双樹下、入般涅槃時、与五百阿羅漢声聞漏尽人俱。爾時、須弥北面一墓所鎮法行。

【訓】是の如く我聞けり。一時、仏、菩提双樹の下に在りて、般涅槃に入る時、五百阿羅漢と声聞との漏尽の人と俱なりき。その時、須弥の北面の一墓にて所鎮の法を行ず。

【訳】このように私は聞いた。ある時、仏は菩提双樹の下で、完全な涅槃に入ろうとする時、煩惱が尽きた五百人の阿羅漢や仏弟子たちと一緒であった。その時、須弥山の北側の墓所において、墓を作るための地鎮の法をおこなった。

爾時、梵王帝釈天龍八部、来下悲涙、作礼啼泣、以宝瓔珞并天伎楽、仏涅槃像運擔奉送。爾時、鎮法処五方龍王所従眷属、不置奉論。

【訓】爾の時、梵王・帝釈・天龍八部、来り下りて悲涙し、作礼して啼泣す。宝瓔珞並びに天の伎楽を以て、仏の涅槃像を運擔し奉送す。爾の時、鎮法処の五方龍王と従ふ所の眷属、置き奉らずと論す。

【訳】その時、梵王・帝釈・天龍八部は、天から下つて来て悲涙にくれ、礼拝して啼泣した。宝瓔珞と天の伎楽でもつて亡くなられた仏の遺体を担いで墓所までお送りした。その時、地鎮した土地の五方龍王とそれに従う者たちは、埋葬申し上げることはできないと論じた。

【注】来下悲涙Ⅱ「来たりて悲涙を下す」とも訓める。この前後は、「不置奉論」その他、漢文らしくない表現が

目立つ。

爾時、大智舍利弗阿難等白仏言、天上天下為我第一。所勅而此五龍王并眷屬、仏滅度像置不肯受。是何因縁。仏告阿難舍利弗、為我往昔此等不説五種生滅之法。今當是時。為聞此法果証、我滅度像、暫不信受。是故鹿野園一日一夜住涅槃中、宣説此經。

【訓】 爾の時、大智の舍利弗と阿難等、仏に白して言さく、天上天下、我第一為り。勅する所にして、此の五龍王並びに眷屬、仏の滅度の像を置くことをば、受けることを肯んぜず。是れ何の因縁ぞ。仏、阿難と舍利弗に告ぐ。我、往昔、此等に五種生滅の法を説かず。今は當に是の時なるべし。此の法を聞いて証せんが為に、我が滅度像を、暫く信受せず。是の故に、鹿野園にて一日一夜、涅槃中に住して、宣しく此の經を説くべし。

【訳】 その時、大智の舍利弗と阿難などが、仏に次のように申し上げた。釈尊は、天上天下、自分こそが第一である（と誕生時に仰せられました）。その釈尊のご命令であるのに、この五龍王とその仲間たちが、仏が涅槃されたご遺体を埋葬することを、承諾しません。これはどのような因縁によるのでしょうか。仏は、阿難と舍利弗に告げた。私は昔、これらの者たちに五種生滅の法を説かなかつた。このため、鹿野園において一日一夜、涅槃に入ったまま、この經を説くのが良いだろう。

爾時、天龍八部、一切神祇等、歎喜踊躍。但此五龍王等、尚不信伏。爾時、仏便從棺起立、為此五龍王、五色幣帛捧、并土祖父土祖母土公土王子孫等名号呼立、演説此地心經、入涅槃。

【訓】 爾の時、天龍八部、一切神祇等、歎喜踊躍す。但だ此の五龍王等は、尚ほ信伏せず。爾の時、仏、便ち棺

より起立し、此の五龍王の為に五色の幣帛を捧げ、並びに土祖父・土祖母・土公・土王と子孫等の名号を呼び立て、此の『地心経』を演説して、涅槃に入れり。

【訳】その時、天龍八部や一切神祇などは、歡喜し踊躍した。ただ、この五龍王などだけが、やはり信服しなかつた。その時、仏はそこで棺から立ち上がり、この五龍王に対して五色の幣帛を捧げ、土祖父・土祖母・土公・土王と子孫等の名を呼び立て、この『地心経』を演説してから、涅槃に入った。

爾時、五百弟子天龍八部、持以栴檀香為薪燒奉。其香遍三千大千世界内。爾時、五龍王土神眷屬、合掌禮拜。爾時、仏為説神呪陀羅尼曰、

【訓】爾の時、五百弟子と天龍八部、栴檀香を持ちて薪と為し燒き奉る。其の香、三千大千世界内に遍す。爾の時、五龍王と土神と眷屬、仏を合掌し禮拜し畢る。爾の時、仏、為に神呪陀羅尼を説きて曰く、

【訳】その時、五百弟子と天龍八部は、栴檀香を持つて薪とし、仏を燒き申し上げた。その香りは、三千大千世界内に行き渡つた。その時、五龍王と土神の眷屬は、仏を合掌して禮拜しおわたつた。その時、仏は彼らの為に神呪陀羅尼を次のように説いた。

五 『仏説地心陀羅尼経』(二)：中央の陀羅尼部分の翻刻

南無東方青帝龍王阿修何提

南無南方赤帝龍王那頭化提

南無西方白帝龍王那業提婁

南無北方黑帝龍王迦楼化提

南無中央黃帝龍王謝羅波提

南無東方海龍王加許 南無南方海龍王修戒 南無西方海龍王神眩 南無北方海龍王中卿

南無東方提頭賴吒天王 南無南方毗瑠勒叉天王 南無西方毗瑠博叉天王 南無北方毗沙門天王 南無中央黃帝

大弁天王

南無東方四天天王 南無南方四天天王 南無西方四天天王 南無北方四天天王 南無中央四天天王

南無東方宿角亢亥房心尾箕

南無北方宿斗牛女虛危室壁

南無西方宿奎婁胃昂畢觜參

南無南方宿井鬼柳星長翼軫

南無東方魚鮫龍貉兔狷虎豹狸

南無南方鷹鴈羊獐馬鹿蛇蚓蟬

南無西方豺狼狗雉鷄烏猴猿狢

南無北方鼈蠃牛狄鼠鸞猪熊羆

正月六甲大將軍王天頭孔王沙孔王孔雀王甘加王斗加王斗宋王斗孔王

南無東方左青龍王 南無南方前朱雀王 南無西方右白虎獸王

南無北方後玄武王

梵天帝釈四天大王日月菩薩五方大龍王二十八宿諸善神王諸天護法一切善神龍王等

正月微明亥為水神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

二月天魁戌為土神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

三月從魁酉為金神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

四月伝送申為金神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

五月小吉未為土神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

六月勝先午為火神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

七月太一巳為火神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

八月天岡辰為土神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

九月大衝卯為木神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

十月功曹寅為木神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

十一月大吉丑為土神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

十二月神后子為水神月將大神光明護法四天大王主八万四千七十藥叉大將

正月微明亥為水神彌勒菩薩

二月天魁戌為土神觀自在菩薩

三月從魁酉為金神阿彌陀仏

四月伝送申為金神大勢至菩薩

五月小吉未為土神摩尼支天菩薩

六月勝先午為火神梅檀香如來

七月太一巳為火神地蔵菩薩

八月天岡辰為土神文殊師利菩薩

九月大衝卯為木神藥師瑠璃光如來

十月功曹寅為木神普賢菩薩

十一月大吉丑為土神最淨地陀羅尼菩薩

十二月神后子為水神釈迦牟尼仏

正月徵明阿鬼虞舍那仏功德天王

二月天魁觀世音菩薩

三月從魁天獄菩薩摩醯首羅帝釈迦樓羅王

四月伝送地蔵菩薩閻羅大王

五月小吉日光菩薩梵天帝釈那羅延護法善神等

六月勝先梵天王四天大王

七月太一地蔵菩薩

八月天岡七仏釈迦牟尼仏皇帝堅牢地神王等

九月大衝藥師瑠璃光如來

十月功曹普賢菩薩

十一月大吉最淨地陀羅尼菩薩

十二月神后弥勒菩薩

正月微明亦名弥勒菩薩成即黑龍王水神亥地坐

二月天魁亦名觀世音菩薩成即黃龍王土神戌地坐

三月從魁亦名阿弥陀仏成即白龍王金神酉地

四月伝送亦名大勢至菩薩成即白龍王金神酉地坐

五月小吉亦名摩利支天菩薩成即黃龍王土神未地坐

六月勝先亦名梅檀香如来成即赤龍王火神午地坐

七月太一亦名地藏菩薩成即赤龍王火神巳地坐

八月天岡亦名文殊室利菩薩成即黃龍王土神辰地坐

九月大衝亦名藥師瑠璃光如来成即青龍王木神卯地坐

十月功曹亦名普賢菩薩成即青龍王木神寅地坐

十一月大吉亦名最淨地陀羅尼菩薩成即黃龍王土神丑地坐

十二月神后亦名弥勒菩薩成即黑龍王水神子地坐

功曹大神光明護法大神王呪

大衝大神光明護法大神王呪

天岡大神光明護法大神王呪

太一大神光明護法大神王呪

勝先大神光明護法大神王呪

小吉大神光明護法大神王呪
伝送大神光明護法大神王呪
從魁大神光明護法大神王呪
天魁大神光明護法大神王呪
微明大神光明護法大神王呪
神后大神光明護法大神王呪
大吉大神光明護法大神王呪
正月微明月將金毗羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
天魁月將神耆羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
從魁月將弥佉羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
伝送月將安陀羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
小吉月將摩尼羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
勝先月將宋林羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
太一月將因持羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
天岡月將波那羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
大衝月將摩休羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
功曹月將真陀羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪
大吉月將照頭羅大將八万四千鬼神王結呪呵呪

神后月将毗伽羅大将八万四千鬼神王結呪呵呪

神名弥佉羅安捺羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

安陀羅迷佉羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

摩尼羅安涅羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

摩睺羅摩呼羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

波那羅異持羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

因持羅安陀羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

昭頭羅招度羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

真陀羅真達羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

毗迦羅鼻羯羅大将七千夜叉八万四千大神光明護法四大大王

金毗羅天鬼成立神

南無東方藥師瑠璃光如来救脫菩薩福神天王

南無南方栴檀香如来地藏菩薩福神天王

南無西方阿弥陀如来大勢至菩薩福神天王

南無北方釈迦牟尼仏弥勒菩薩福神天王

南無東方各々流王 南無南方各々流王

南無西方各々流王 南無北方各々流王

南無中央各々流王 南無東方阿利須師

南無西方阿利須師 南無南方阿利須師

南無北方阿利須師 南元中央阿利須師

娑婆呵

六 『仏説地心陀羅尼經』(三) : 本文後半の訳注

爾時仏告阿難言、末世衆生為二親祖父母并六親眷屬、若死亡日月、隨時獲得方地、欲治置者、為先其所五帝土公土神種種供具持以奉上而鎮法、此陀羅尼誦五遍、每方甚大吉利。

【訓】 爾の時、仏、阿難に告げて言く、末世の衆生、二親・祖父母并びに六親と眷屬の為に、若し死亡せる日月に隨時に方地を獲得し、置を治めんと欲せば、先ず其の所の五帝・土公・土神の為に、種々供具を持ちて奉上して鎮法し、此の陀羅尼を誦すること五遍すれば、每方に甚だ大吉利ありと。

【訳】 その時、仏は阿難に告げて言つた。末世の衆生が、二親・祖父母、そして六親と眷屬のために、もしその人たちが死んだ月日や、いつであれ墓所の地を得てそこに埋葬しようとするならば、まずその場所の五帝・土公・土神の為に、種々の供具を持って奉上して地鎮し、この陀羅尼を五回誦すれば、どの方角に埋葬しても非常に幸いな結果となる。

我釈迦猶暫煩此処。何況末世凡愚。若所鎮墓、先此地心經誦十卷、即令惡心五帝土公眷屬神鬼等、各得菩提果、歡喜踊躍。後世子孫、安隱豊樂、壽命延長、官位高尊、大富自在。

【訓】我が釈迦すら猶ほ暫く此処を煩ふ。何に況んや末世凡愚においておや。若し鎮する所の墓には、先ず此の地心経を読誦すること十卷せば、即ち悪心の五帝・土公・眷属の神鬼等をして、各の菩提の果を得て、歡喜踊躍せしめん。後世子孫は安隱豊樂にして、寿命延長、官位高尊、大富自在ならん。

【訳】我が釈尊ですら、この問題については少々悩まれた。まして末世の凡愚はもちろんのことだ。もし墓に地鎮するなら、まずこの『地心経』を十回読誦せよ。そうすれば、悪心の五帝・土公とその眷属の鬼神たちは、それぞれ菩提を得て大喜びするだろう。また後世の子孫は、安穩なまま栄え、寿命が延び、官位も高くなり、莫大な富を我がものとするだろう。

若人建立其地道場、読誦此経、成就功德、大平安隱。若人欲新家居者、読誦此経、得大平安。若荒野鬼神怨敵所在、読誦此経、即皆降伏和順。

【訓】若し人、其の地に道場を建立せんに、此の経を読誦せば、功德を成就し、大平安隱ならん。若し人、新家に居らんに、此の経を読誦せば、大平安を得ん。若し荒野の鬼神・怨敵の在る所にて、此経を読誦せば、即ち皆な降伏和順せん。

【訳】もし人がどこかの地に道場を建立する場合、この経を読誦すれば、功德が完成し、大平であつて安穩となることが出来るだろう。もし人が、新しい家に住もうとする際、この経を読誦したら、大平安に得るだろう。もし人が荒野の鬼神や怨敵のいる場所においても、この経を読誦したら、ただちにその者たちは降伏して穏やかに順うだろう。

若人家内在、早朝両手洗浴、合掌向東方、食前之時、読誦二卷、身心平安、無有悪夢悪想及疾病。若人乗車船時読誦此経、不遭大風大雨盜賊怨敵之難。若人市津海山交易、活売價出往時、読誦此経、無諸妨難、得千万倍利。

【訓】若し人、家内に在らば、早朝に両手を洗浴し、合掌して東方に向かい、食前の時、読誦すること二卷せば、身心平安にして、悪夢・悪想及び疾病有ること無からん。若し人、車船に乗る時、此の経を読誦せば、大風大雨盜賊怨敵の難に遇はざらん。若し人、市津海山にて交易し、活売價出に往く時、此の経を読誦せば、諸の妨難無く、千万倍の利を得ん。

【訳】もし人が家にいる場合、早朝に両手を洗い、東方に向かつて合唱し、食前の時に二卷を読誦すれば、身心は平安となり、悪夢・悪想、そして疾病が起こることは無くなるだろう。もし人が車や船に乗る時は、此の経を読誦すれば、大風・大雨・盜賊・怨敵の災難に遭わない。もし人が市場や港や海や山で交易しようとして、商売に出かけて行く時、此経を読誦すれば、様々な妨げが無く、千万倍もの利益を得るだろう。

若人為悪人厭媚呪詛、彼召五帝土神眷属八万四千大將軍衆名、読誦此経、得解脱、呪還着本人、無諸苦患。若人依富田地云論闡諍、亦依馬牛驅使人等狗雞之事、論闡其地、此経読誦二十五卷、無有愁惱。

【訓】若し人、悪人の為に厭媚呪詛せらるれば、彼は、五帝・土神と眷属の八万四千大將軍衆の名を召して、此の経を読誦せば、解脱を得て、呪は本人に還着し、諸の苦患無からん。若し人、富田地に依りて云論闡諍し、亦た馬牛驅使人等や狗雞の事に依りて、其の地を論じ闡はば、此の経を読誦すること二十五卷なれば、愁惱有ること無からん。

【訳】もし人が悪人に厭媚呪詛されたなら、その人は、五帝・土神と眷属の八万四千大將軍衆の名を呼んで集め、

此の経を誦誦すれば、解放されることができ、呪詛はかえつて呪つた本人に着き、様々な苦患が消えるだろう。もし人が、富田地によつて争論となり、また馬牛や牧人などや犬雞などの事によつてその地をめぐる争論となれば、この経を誦誦すること二十五回すれば、愁惱は無くなるだろう。

若人常腹痛目病耳病口病舌病胸病意病腰痛尻病間病閉病足手病風病熱病在時、呼驚五帝土祖眷属等、誦誦此經、病則除愈。若有女人産時、誦誦此經、安樂産兒。幼子夜鳴時、誦誦此經、平安無災。

【訓】若し人、常に腹痛・目病・耳病・口病・舌病・胸病・意病・腰痛・尻病・間病・閉病・足手病・風病・頭痛・熱病在る時、呼びて五帝・土祖と眷属等を驚かせ、此の経を誦誦せば、病は則ち除愈せん。若し女人有りて産む時、此の経を誦誦せば、安樂に兒を産まん。幼子、夜に鳴く時、此の経を誦誦せば、平安にして恐れ無からん。

【訳】もし人が、常に腹痛・目病・耳病・口病・舌病・胸病・意病・腰痛・尻病・間病・閉病・足手病・風病・頭痛・熱病がある場合、五帝・土祖と眷属等と呼んで目覚めさせ、この経を誦誦すれば、病はすぐに癒えるだろう。もし女性が産む時、この経を誦誦すれば、安樂に兒を産むことだろう。幼い子が夜に泣く場合、この経を誦誦すれば、安らかになつて恐れが無くなるだろう。

若人家者、野犴鳴恠鳥鳴犬長嘯万恠時、誦誦此經、一切不遭惡夜叉。若人祖父祖母父母置墓地、若居地起立新家、誦誦此經。欲蒙善神覆護、能為鎮法応居、誦誦此經。

【訓】若し人、家ならば、野犴鳴き、恠鳥鳴き、犬長嘯し、万恠ある時、此の経を誦誦せば、一切、惡夜叉に遭はざらん。若し人、祖父・祖母・父母を墓地に置かんに、若しは居る地に新家を起立せんには、此の経を誦誦せよ。善

神の覆護を蒙らんと欲し、能く鎮法を為して居るべからんには、此の經を誦誦せよ。

【訳】もし人が家において、野干が鳴き、怪しい鳥が鳴き、犬が長くほえ、様々な怪異がある時は、この經を誦誦したら、鬼神などには全く遭うことがない。もし人が祖父・祖母・父母を墓地に埋葬しようとしたら、またもし現在いる土地に新しい家を建てようとするなら、この經を誦誦せよ。善神に守ってもらいたいと願ひ、地鎮の法をなしてここに住みたいと思ふなら、この經を誦誦せよ。

三世諸仏菩薩、出世所説、秘密法蔵。一切天神一切地神、共離業道、歡喜踊躍。大乘教典小生疑者、永無威徳。一切人民死亡時置地蔵、誦誦此經、當得成仏。

【訓】三世の諸仏と菩薩、出世の所説にして、秘密法蔵なり。一切天神一切地神、共に業道を離れ、歡喜踊躍せん。大乘教典に小しも疑を生ずる者は、永く威徳無からん。一切人民死亡する時、地に置きて蔵せんに、此の經を誦誦せば、當に成仏するを得べし。

【訳】この經は三世の諸仏と菩薩がこれ説くために世に出現した經であり、秘密の法蔵である。一切の天神、一切の地神も、これを聞けば生存の領域から離れることができ、歡喜踊躍する。この大乘經典に対して、少しでも疑いを生ずる者は、永遠に繁榮しないままだろう。誰であれ人が死んだ時、地に埋葬する際、この經典を誦誦すれば、必ず成仏することができるだろう。

若人上品得大地価直黄金千両、大絹十疋細布二千端五色幣帛紙百帖白米二斛種々酥蜜雜果物等、持用五帝土祖眷屬呼名立名号貢上。中品人得中地准上品人各各半分貢上。下品人得小地、准中品人各々半分貢上。如是三品、

鎮法貢上、大分得富貴。

【訓】若し人、上品にして、大地の価、黄金千兩に直るを得ば、大絹十疋・細布二千端・五色幣帛・紙百帖・白米二斛・種々酥蜜・雜果物等を持用いて、五帝・土祖と眷屬とを、名を呼びて名号を立てて貢上せよ。中品人にして中地を得れば、上品人に准じて、各各の半分を貢上せよ。下品人にして小地を得ば、中品人に准じて、各各の半分を貢上せよ。是の如き三品は、鎮法して貢上せば、大分、富貴を得ん。

【訳】もし人が上品であつて、黄金千兩の価値を持つ土地を得たら、大絹十疋・細布二千端・五色幣帛・紙百帖・白米二斛・種々の酥蜜・様々な果物等をもつて、五帝・土祖と眷屬とを名を呼んで名号を唱えて、これらの品を献上せよ。中品の人が中地を得た場合は、上品人に准じて、各各の半分を貢上せよ。下品の人が小地を得た場合、中品人に准じて、各各の半分を貢上せよ。こうした三品の人々は、地鎮の法をおこなつて五帝などに供物を献上すれば、大いに富貴を得るだろう。

若有人者亦無財宝、如是人輩世間多有、不如意趣。至心読誦大乘經典、彼尽資財物自貢上、福德具足。読誦此經、功德百倍千倍、超過算數、譬喻不能度量。

【訓】若し人者有つて亦た財宝無きは、是の如き人輩は、世間に多く有りて意趣の如くならず。至心に大乘經典を讀誦し、彼、資財物を尽くして自ら貢上せば、福德具足せん。此の經を讀誦せば功德は百倍千倍にして、算數を超過し、譬喻も度量する能はざらん。

【訳】人には財宝が無い者もいるが、こうした人は世間に多く存在しており、自分の思うようにならずにいる。そうした人は、一心にこの大乘經典を讀誦し、資財を尽くして進んで五帝などに供物を献上すれば、財産

が備わるだろう。この経を読誦すれば功德は供物の価値の百倍千倍であつて、計算を超えており、譬喩を用いても計りきれない。

注

- (1) 石井公成「物真似芸の系譜(上)」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第七十一号、二〇二三年三月)。
- (2) 増尾伸一郎『地神経』変奏―地神盲僧と朝鮮の琵琶居士・経巫とのあいだ―(『国文学 解釈と教材の』第四十六巻き第十号、二〇〇一年八月)。近年の単著としては、永井彰子『日韓盲僧の社会史』(葦書房、二〇〇二年)。
- (3) 岩橋小弥太「盲僧考(上)―興福寺支配下の盲僧―」(『社会史研究』第十卷第一号、一九三三年七月)。「東山往来」では第六条(『日本教科書大系 往来篇 第一巻 古往来(一)』講談社、一九六八年、三八二―二頁)。
- (4) 現在の「読経」のあり方については、笹森建英「読経師―韓国盲僧の調査と考察―」(『弘学大語文』第四十号、二〇一四年三月)。
- (5) 韓国珍島郡臨湍面の晴眼の「読経」である李準容氏が本経を含む諸経典を所持していた。伊藤は後に「韓国の民間信仰における道教の伝統」(『朝鮮文化研究』第一号、一九九四年)で、これらの経典について報告している。
- (6) 荒木博之「盲僧の伝承文芸」(五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登編『講座・日本の民俗宗教7 民間宗教文芸』弘文堂、一九七九)。
- (7) 増尾伸一郎「朝鮮における道仏二教と巫俗の交渉―附、朝鮮本『仏説広本太歳経』」(『東京成徳大学人文学部日本語・日本文化学科研究紀要』第五号、一九九八年)。
- (8) 星野和幸「盲僧の所持経典―『地神経』をめぐる―」(『駒澤大学仏教学部研究』第十八号、二〇二五年二月)。